

平成 30 年度第 2 回多摩市ニュータウン再生推進会議 議事要旨

日 時	平成 30 年 11 月 29 日 (木) 15:00~16:30	場所	パルテノン多摩第一会議室
出席者 (敬称略)	<p>【委員】 上野淳、西浦定継、松本真澄、松崎浩一、中山衛、中尾唯史、領家正明、小野澤裕子、加藤岳洋、楊光耀、藤浪裕永、森田佳宏</p> <p>【専門委員】 櫻井俊樹、平野幹二</p> <p>【事務局】 企画政策部：企画課長 都市整備部：都市計画課長、住宅担当課長、ニュータウン再生担当課長</p>		

1. 開会

事務局より開会

2. 議事

(1) 多摩市ニュータウン全体計画の検討について

- 委員 資料の拠点を示す図について、地域拠点の沿道型地域拠点には赤やピンクの縞模様があるが、二種類の色はどのような意味があるのか。

事務局 赤が重点的な部分、ピンクは将来的な部分も含めた補完的な部分を意味している。

- 委員 諏訪・永山地区の南北幹線道路が「賑わい中心軸」とされているが、駅の南側は歩車分離されている場所が多く、駅から 1 km 以内の居住者は、歩行者専用道路を通勤通学などの日常的な動線として使用している。多摩センターも歩行者専用道が賑わいの中心となっている。ネットワークの方針として歩行者専用道路にも賑わいをイメージした方が良いのではないかと。高齢者の免許返納や若い方のカーシェア等により、将来的に移動手段が自動車から自転車、徒歩などに移っていくと予想されるため、今後の街の賑わいを考えると、駅から続く歩行者専用道路も賑わいの中心にしてよいのではないかと。

上野委員長 多摩ニュータウンの大きな特色の一つは、ペDESTリアンデッキのネットワークが公園や駅をつないでいるというところで、世界的にも非常にユニークな街の構造となっている。ペDESTリアンデッキのネットワークと賑わいの接点や駅に至る道については今後の課題とする。

- 委員 駅から夜に帰宅する際に住宅地近くが非常に暗い。歩行者専用道路の賑わいを検討し、連続的でなくても明るい動線にすることで老若男女がより住みやすい街になるのではないかと。

- 委員 資料では地域拠点や尾根幹線沿道拠点に加え補完拠点というものが追加され、ネットワークが東西方向、南北方向にも繋がる形になったと感じる。歩車分離を生かし、技術の発展を見据

え、シニアカーなどの移動手段も視野に入れられるのではないか。多摩ニュータウンは歩道がしっかりできているので、シニアカーなどで移動の円滑化を図ることが出来れば、身近なコミュニティや拠点間の連携が強化されると思う。拠点と移動の円滑化を踏まえたコミュニティループについても今後検討するほうがよいと思う。

また第2次入居地区の検討は今後大切な視点である。第2次入居地区でも初期入居地区と同じような問題が今後発生する。愛宕地区辺りでも諏訪・永山地区でリ・デザイン計画が作成されたように、将来を見据えた計画を作ることが重要。そうした中で広域的にみると、多摩ニュータウン通りから北の方のネットワークが足りないと感じる。第2次入居地区の検討の際もコミュニティループなどのネットワークを視野に入れ検討してもらいたい。

多摩ニュータウンは4市で1つと考えているので、隣接する八王子市とも連携するなどニュータウン全域の再生に繋げてもらいたい。都も関係部署と連携して積極的に協力する。

上野委員長 第2次入居の愛宕地区をはじめ貝取・豊ヶ丘地区で次のイメージを決めないといけない。諏訪・永山地区の将来イメージはでき始めてきた。多摩ニュータウン通りの北側のネットワークは意識が抜けがちなため注意する。

●●委員 ネットワークについて、例示されている図は平面的だが実際に歩くと非常に高低差が多く立体交差などもある。断面的な検討も行い、立体的イメージを持って検討が行えるようにしてはどうか。

上野委員長 ペDESTリアンデッキで水平移動していて、いざ下に降りてバスに乗ろうとすると、高低差のバリアを感じることもある。どう解決していくかは多摩ニュータウンの課題の一つ。

## (2) リーディングプロジェクトについて

リーディングプロジェクトについて説明

●●委員 ワークショップの途中で前提条件の追加などもあったが、4回のワークショップを通して、メンバーの方は休憩時間も休まずに熱心に作業されていた。感謝している。3回目のポスターセッションには多くの市民の方が参加してくれた。

上野委員長 資料のグラフを見てもわかるように、若者の参加が多く、興味を持ってもらえて嬉しく思う。

●●委員 多摩センターにサテライトオフィスをオープンした。通勤時間の削減やワークライフバランスを支援することを1つの目的としている。

もう1つの目的は、オフィスの一部をオープンスペースとして活用していくこと。オフィス利用者のみならず、地域の人に使ってもらえるように場所を解放したいと考えている。

●●委員 子育て世帯や高齢者世帯の入居支援をしている。特に初期の段階で建設した団地は高齢化率も高い。こうした団地は階段室型が多いため高齢者には低層階を優先してご案内している。あわせてコミュニティの活性化や維持の観点から、子育て世帯や若者に入居してもらうことが重要だ

と考へ、子育て世代の入居を支援している。特にひとり親の世帯については11月から割引制度を含め支援制度を開始した。

今後は近隣センターに空き店舗が増えることが予想され、コミュニティの維持が大きな課題となる。コワーキングスペースなどとしての活用の可能性について情報を収集していきたい。

上野委員長 近隣センターの再活性化はこの地域において大事なテーマとなる。

### 市民と共に描く永山駅周辺再構築ワークショップ最終報告（案）について説明

●●委員 ワークショップの「2040年代の理想の永山駅周辺」では独創的な意見が多く出た。土地の高低差を解消する手段としての建物の高層化やスカイウェイや小型モビリティの利用など、ワークショップ内でも移動という点が議論された。移動は永山駅の課題であるが、解消出来れば永山の魅力にも繋がると感じた。地権者が異なることにより統一感がない作りやバリアが生じていることを、ワークショップを通じて知ることが出来た。日医大病院の移転や自動運転などの最新技術の進捗状況によっては、今回は2040年の再構築ビジョンの検討をしたが、ペースが早まると思う。人の賑わいや移動が自然と生まれるような街になると良いなと感じる。

上野委員長 大変夢のある、また若い人たちの意見で心強く思う。今後永山だけではなく他の地域でも行っていけば良いという気がする。

### 3. その他

●●委員 資料には開発年代の違いを踏まえた住宅供給が必要と記載がある。落合など比較的新しい街は建て替えではなく活用する方向にしてほしい気持ちがある。また貝取・豊ヶ丘は住戸面積は狭くない。今ある建物を安い金額で若い人が購入して自分でリノベーションして住むという方法も考えられれば、若い子育て世代をうまく呼び込めるのではないかと思う。ワークショップ参加者の多くが感じていたことは、永山らしさを大切にしたいということ。永山らしく小規模な店舗が集まるような駅や今の緑を活かせるような駅になれば良いという話が上がった。多摩センター、聖蹟桜ヶ丘、唐木田を含めた4駅がそれぞれオリジナルな駅になれば良いのではと思う。

●●委員 資料でプロジェクトの進行を示している。不確定要素は公表することは出来ないが、それも含めてプロジェクトの進行を考えて行かないといけないと思う。

多摩都市モノレールや尾根幹線道路の整備、自動運転など諸々のことが渦巻いている。どのように展開するか先を見据えなければならぬが、表立って議論するまでにはまだ熟しておらず時間がかかる。各セクターの人と意見交換や意見共有をしていきたい。

今は都市構造の議論をしているが、実際に拠点がうまく活きるかは、周りの人たちの住まい方やライフスタイルが関係してくる。市民ワークショップを具体の地区で展開して、住まい方や拠点の使い方などゾーニングだけでは足りない部分について議論したい。

リビングラボは計画の大枠が出来た後に各地区で住まい方の議論をしていく際に、実験的に何かに取り組む手法の1つ。他の自治体で実際に行っている事例もあるため、参考にしながら大枠が出来た後に議論していきたいと思う。

全体計画案は都市計画マスタープランに反映されるので、都市計画マスタープランと連携しながら検討を進めたい。来年度以降議論できればと思う。

#### 4. 閉会

事務局より今後の予定について説明

- ・平成 30 年度多摩ニュータウン再生シンポジウムは 2/4（月）の午後にパルテノン多摩の小ホールで実施  
予定